

漁師のよさと魚のうまさを伝えたい
～潜水漁業者による水産教室の開催～

大分県漁業士連絡協議会潜水漁業部会
吉 良 学

1. 地域の概要

大分県は瀬戸内海と豊後水道に面した九州東岸に位置し、海岸線の総延長は 759km（全国 13 位）で、広大な干潟域をもつ豊前海からリアス式海岸の豊後水道まで変化に富んだ地形を有し、それぞれの海域ごとに特徴のある漁業・養殖業が営まれている（図 1）。



図1 大分県の位置図

2. 漁業の概要

大分県漁業協同組合は平成 14 年に各地先の漁協が合併し、27 支店、約 9,500 人の組合員で組織する県 1 漁協である。私たちの従事する潜水漁業は、県内の各地で、主にアワビ、サザエ、ウニ、ナマコを漁獲している。

3. 研究グループの組織と運営

昭和 61 年から大分県による漁業士の認定が始まった。平成 11 年には漁業士間の連携を目的として、大分県漁業士連絡協議会（通称、漁業士会）が設立され、現在、115 名の会員が所属している。漁業士会は、漁業種類ごとに 7 つの部会で構成されており、各部会では複数支店の部員が所属していることが特徴である（図 2）。

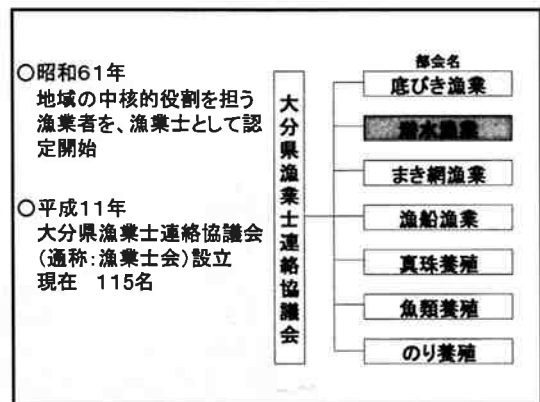


図2 大分県漁業士会の概要

潜水漁業部会は、現在、国見、臼杵、津久見、鶴見の 4 支店 16 名が所属している（図 3）。活動内容は、勉強会の開催、水産教室の開催、先進地視察研修などである。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

平成 12 年度に部会の活動を話し合った際、津久見支店の部員から「四浦地区は漁師の子供も多いのに、海の良さや漁業について知らなすぎる」や「後継者が少ないことが過疎化に繋がっている」という問題提起があり、部員で話し合った結果、「漁業は単なる労働、

魚はただの商品ではなく、その地域の文化だ！」、
「子供の頃から、地域漁業やその取り組みを教えることが大切であり、それが魚食普及にも繋がるのでは」という考えに至った。

(1) 海の良さと魚のうまさを伝えたい

さっそく、PTA 会長を務めている部員が小中学校に水産教室の開催を持ちかけたところ、協力が得られ、津久見支店の部員によって水産教室を始めることになった。また、「魚の本当のうまさを、もっと多くの子供に知ってもらいたい」という全部員の思いから、漁村から離れた

小中学校には、全部員で、魚食普及を中心とした水産教室を始めることになった。

(2) 漁業後継者育成の取り組み

本部会は、私をはじめ、半数近くの部員が大分県立海洋科学高校の出身である。昔は漁師の子供が同校を卒業し、後継者になることが多かったが、近年は、同校卒業生が漁師になることはほとんどなく、私達は寂しい思いをしていた。津久見での小中学校への水産教室に一定の成果を感じていた私たちは、「こんなじゃだめだ、本当の漁師の良さを体験させたい」という強い思いをもった。県内唯一の水産系高校で水産教室を開催し、授業では味わえない漁業の楽しさや苦勞、漁業者の取り組みについて知ってもらい、漁業就業のきっかけとして欲しいと考えた。さっそく、私の学科の担当だった先生に相談したところ、「生徒が漁業の現場を知らないため、漁業に興味を持てない。ぜひ、やって欲しい」と快諾をもらい、部会で提案したところ「後継者候補たちのために、我々漁業士が講師となって水産教室をやろう！」ということになり、全部員で水産教室を開催することとなった。

5. 研究・実践活動状況及び成果

水産教室の開催場所は、津久見で始めたのをきっかけに、鶴見、臼杵へと、また、取り組む漁業士も開催地域の部員から、部会全体へと広がり、これまで6年間で水産教室は計16回開催した(表1)。

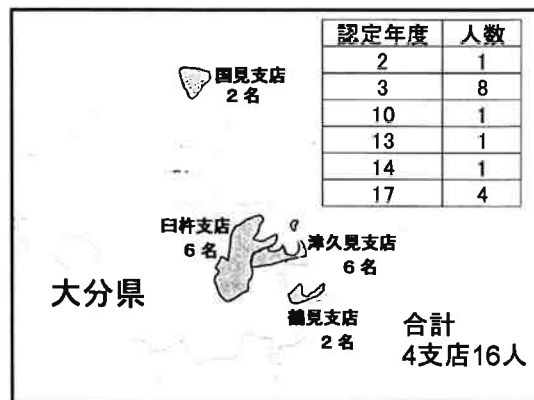


図3 潜水漁業部会の構成

表1 水産教室の開催状況

年度	開催地域	対象	取り組んだ部員	回数
13	津久見	四浦東中、越智小	津久見支店	1
14	津久見	四浦東中	津久見支店	3
15	津久見	四浦東中	津久見支店	1
16	津久見	四浦東中	津久見支店	2
	鶴見	小学生、保護者	鶴見支店	1
	臼杵	海洋科学高、臼杵東中	部会全体	1
17	津久見	四浦東中	津久見支店	1
	臼杵	臼杵西中	部会全体	1
	臼杵	海洋科学高	部会全体	1
	津久見	青江小	部会全体、まき網部会	1
18	津久見	四浦東中、越智小	津久見支店	1
	津久見	青江小	部会全体、まき網部会	1
	臼杵	海洋科学高、豊洋中	部会全体	1
合計				16

(1) 海の良さと魚のうまさを伝えたい

まずは、平成 13 年度に、津久見市四浦地区の小中学校を対象に水産教室を開催した。地元の主要漁業である私達の漁業を知ってもらおうと、潜水漁業やウニなどの生態、栽培漁業の取り組みについて説明した後、私たちが自主的に放流している稚ウニを用い放流体験をしてもらった(写真 1、2)。また、生徒が気楽に話せるよう班別に分かれ座談会を行った。生徒からは「どのくらい潜るの?」、「嬉しかったことや苦労したことは?」などの質問があり、私達も楽しく交流ができた。これらは毎年の行事として定着しており、年によっては網ぬい体験、カゴ網漁業体験などを実施した。平成 16 年度には学校から「アワビについて生徒たちに事前学習をさせ、PTA 参観日に発表させたい」との話があったので、アワビの漁法や流通方法、調理方法の学習に協力した(写真 3)。平成 16 年度には鶴見でも水産教室を開催し、私達は、これらの取り組みが、地元の海や漁業について興味を持ってもらえることを実感した(図 4)。

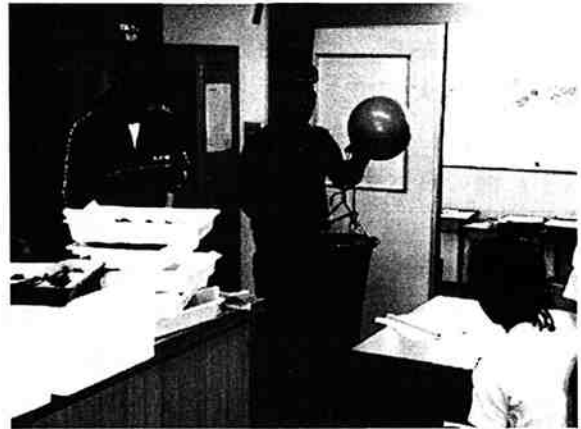


写真1 潜水漁業の説明



写真2 稚ウニ放流体験



写真3 PTA参観日での発表

四浦地区の小中学校から転勤した先生から、「赴任先の学校でも水産教室を開催できないか」と話を持ちかけられたため、平成 17 年度は臼杵市立西中学校と津久見市立青江小学校で開催した。臼杵西中では 2 年生とその保護者、青江小では 6 年生とその保

図4 大分合同新聞朝刊(H18.5.23付)

護者を対象とし、取り組む内容は魚食普及中心のものとした。また、青江小では、部員から「他の部会ともこの取り組みを広げたい」という意見があり、まき網漁業部会と合同で実施することになった。

青江小での取り組みは、早朝に魚市場でアジの出荷見学を行い、次に、学校で、まき網、潜水それぞれの漁業の説明を行い、最後に、料理教室を開催した（写真4～6）。メニューは先生と相談したところ、「包丁を使わせたい」、「潜水、まき網の両方で獲れるものが多い」、ということで、アジの刺身やフライ、サザエの焼き物などとした。まき網漁業部会の部会長のアジの三枚おろしの技術に、生徒らはとても感心したらしく、一生懸命さばいて、できあがりには歓声を上げていた（写真7）。



写真4 アジ出荷見学

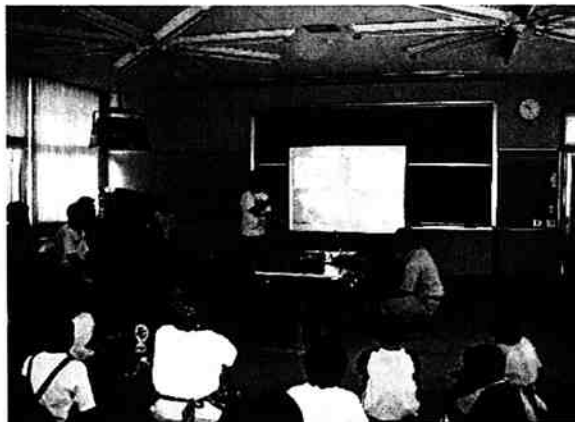


写真5 漁業に関する講義



写真6 青江小料理教室



写真7 まき網部会長も指導

同校では、平成18年度も要望があり引き続き水産教室を開催した。その際、生徒42人に対して、開催日とその5ヶ月後にアンケート調査を行ったところ、「魚を週に何回食べますか？」の質問に「週に3回以上食べる」と答えた生徒が、開催日の28%から5ヶ月後には40%に上昇した（図5）。また、「水産教室後に魚が好きになった」と答えた生徒が48%を示したことは大きな成果だと考えている（図6）。

保護者からは「子供が魚に興味を持った、魚のおいしさを知り、調理を身近に感じた」、「3枚おろしが苦手だったので、大変勉強になった」などのうれしい意見があった。生徒は「普段はあまり魚介類を食べないが、とてもおいしかった」、「初めてさばいた、良い

奥さんになれそう」などの感想があり、魚のおいしさに気づき、そして、苦労して魚をさばいたことで達成感を得たようだった。生徒の積極的な姿勢に私達もやりがいを感じ、子供の頃から魚に興味をもってもらうことは大事だと思った。

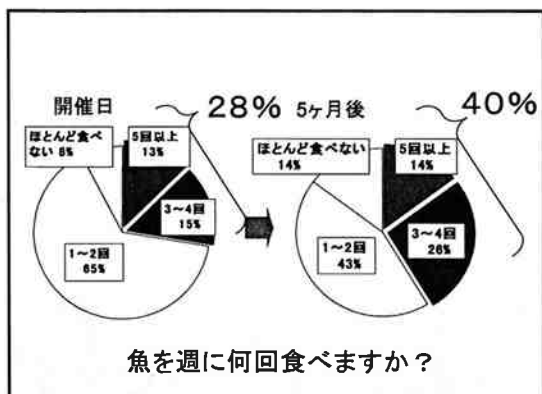


図5 アンケート集計結果その1

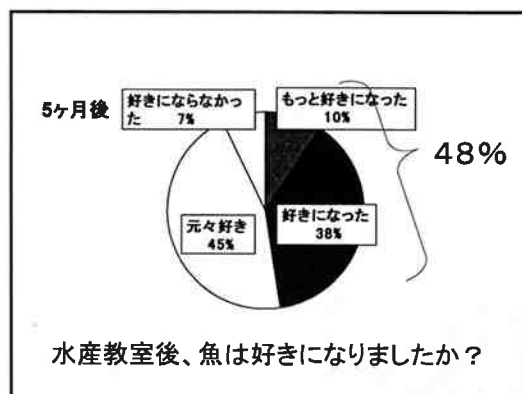


図6 アンケート集計結果その2

(2) 漁業後継者育成の取り組み

平成16年度に海洋科学高校海洋生産科資源管理コース2年生を対象に水産教室を開催した。同校が臼杵市に所在することから、臼杵支店の取り組みについて講義した。まず、潜水漁業の方法、ヒトデ食害調査などについて説明し、アワビの栽培漁業についてのビデオを放映した。次に、アワビの標識放流について説明を行い、全部員指導のもとでアワビ稚貝の標識付け実習を行った。生徒は最初不安そうな手つきで作業をしていたが、次第に慣れて上手になっていた(写真8)。



写真8 アワビ標識付け実習

平成17年度には、「授業では味わえない良い経験になったので水産教室を継続して欲しい」と高校からの要望があり継続している。特に、平成18年度には、「地域の中学校と連携して海の環境について学ぶ、エコスクールの一環として水産教室を開催したい」と高校からの要望があったので、臼杵市立豊洋中学校3年生と合同で開催した。今回は、稚貝の放流まで行い、生徒は高校と漁業士の船に分乗し、私達が海に潜って放流する姿を箱メガネで見学してもらった。生徒は、数年後に標識アワビが採捕されることを楽しみにするなど、現場を体験したことに充実感を感じていた(写真9)。こうした取り組みは、地元の新聞にも取り上げられた(図7)。生徒からは「学校ではできない貴重な体験ができた」、「漁業についてもっと知りたくなった」などの感想があり、漁業に興味を



写真9 アワビ放流見学

持ってもらえたことを私達は実感した。

後日、高校からの報告によると、平成16年度と平成17年度に水産教室を受けた生徒計19名の中に、卒業後に水産関係への就職希望者が6名いたそうである。水産教室の開催前には一人もいなかったが、これらの体験を通じて考えが変わったらしい。このうち5名は希望が叶い、私たちの取り組みが就職先選択のきっかけとなっていることがわかる。

また、18年度に実施した高校生に対するアンケート調査では、「今回の水産教室で、今まで以上に漁業に興味を持ちましたか？」の質問に「より興味を持った」と答えた生徒が7人中3人であった(図8)。私たちは、将来彼らが水産関係に就くことを期待している。

6. 波及効果

小中学校では、水産教室後の職場体験で、漁業者や魚類養殖業者を訪問した生徒もいたと聞いている。また、水産教室を開催した学校から、再度、開催の要望があるとともに、新聞記事を読んだり話を聞いたりした他校の先生からも要望があがっている。

海洋科学高校では、水産教室を通じて取り組んだアワビ飼育試験の内容を、今年11月に、九州地区水産系高等学校生徒研究発表大会で県代表として発表するなど、生徒の自主研究のテーマとしても取り入れられている。また、エコスクールの場合、高校生が中学生に説明するため、水産教室の内容について事前に学習するなど、指導するという立場での責任感も芽生えている。

さらに、私達の取り組みを聞いた真珠養殖部会からは、後継者確保のために真珠の水産教室をしたい、まき網漁業部会からは体験乗船をさせたいという意見もでてきている。他の部会にも後継者育成の意識が広がっている現れである。

7. 今後の課題や計画と問題点

私達の活動は、地道ながら魚食普及や漁業後継者育成に貢献している。

小中学校の水産教室では、これまでは学校と直接やりとりしていたが、私たちの知らないところでも水産教室を開催したい学校があると思うので、教育委員会を通じて希望を募りたいと思う。また、家庭で実際に食事を作る保護者らへの魚食普及も必要と思うので、親子を対象とした料理教室も開催したいと考えている。

メガイアワビに標識を付ける生徒



標識付けアワビ放流

海洋科学高と豊洋中



水部会神田勝之部会長
が関心を持ってもら
い漁業後継者の育成につ
なげよう
と、県中部
振興局と県
漁業士会
から見守り
中(市利砂さん(中学

県教委が進める本年度
エコスクールに指定され
ている臼杵市の海洋科学
高校(田広毅二校長)と
豊洋中学校(田廣福二校
長の生徒が、市内のア
ワビの主産地、泊ケ内
アワビの放流作業を体験
した。
海に思いを持ってもら
い漁業後継者の育成につ
なげよう
と、県中部
振興局と県
漁業士会
から見守り
中(市利砂さん(中学

は「標識を付けるのは意
外に簡単だった。大きく
なったアワビを食べてみ
たい」、甲上権太君(高
校・真実)は「資源が
無限にあると思っただけ
を食べられるのも水産資
源を減らさない」と
話していた。

図7 大分合同新聞朝刊
(H18. 12. 10付)

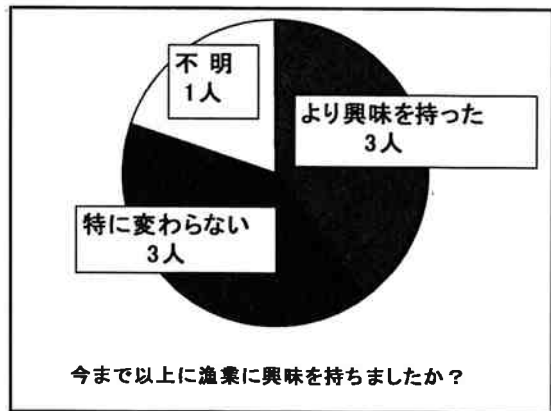


図8 アンケート集計結果その3

漁業後継者育成については、まき網や養殖業のような組織的な漁業については就業しやすいが、漁村出身でもない限り、個人で営む漁業には思うように就業できない現状がある。しかしながら、対策の一つとして、一度、まき網や養殖業などに就業してもらい、地元で馴染むことで個人漁業に就業しやすくなると思う。その場合は我々漁業士が中心となりサポートしていきたいと考えている。

最後に、近年、磯根資源の減少が目立っている。我々漁業士には、未来の漁業者が安心して漁業ができるよう豊かな海を守っていく責務がある。